鳴門教育大学研究紀要
第26巻　2011

アメリカ幼稚園運動におけるEmma Marwedelの働き

―― フレーベル主義者エマ・マーウェデルと新教育運動 ――

橋　川　喜美代

（キーワード：エマ・マーウェデル，フレーベル主義，新教育運動）

はじめに

19世紀末から20世紀初頭のアメリカにおける幼稚園改革運動は，ブロー（Blow, S.）らフレーベル主義保守派による恩物至上主義がもたらした一斉画一的な保育形態から脱却するための動きであった。従来の研究では，この改革をリードしたのは，児童研究運動であり，「新教育」運動である。そして，子どもの善性を信じ，発達に基づく新しい幼児観，幼児教育観に立った「新教育」として注目されたフレーベル（Froebel, F. W.）の幼稚園教育はアメリカに同化される過程で，「フレーベル主義と呼称されるように，幼児の発達や遊びの本来的な意味を損なうような形式化された実践が見られるようになった。フレーベル主義は，E・ピーボディ，ブロー，教師養成に携わったドイツ人教師によって固守された精神であり，態度であったが，実践レベルにおいては恩物を中心にした技術主義に陥っていく」と説明している[1)]。こうした説明では，ブローらフレーベル主義保守派と，ピーボディ（Peabody, E.）や教師養成に携わったドイツ人教師はすべて同列に扱われ，幼稚園教育における理論ならびに実践に見られる解釈上の違いは全く無視されることになる。

ちなみに，アメリカにおける1870年代からのフレーベル主義幼稚園の発展は，貧困・犯罪・衛生といった都市問題と対にして語られてきた。いわゆる移民の流入に伴う大都市の貧児の救済事業として，幼稚園は万能薬のごとく宣伝され，各地に発展していく。これを支えたのが，幼稚園協会の台頭である。ウィスコンシン州のミルウォーキー州立師範学校のバンデウォーカー（Vandewalker, N. A.）は1880年から90年までを幼稚園協会叢生期として位置付けている。幼稚園が一般化し，幼稚園教員養成のための課程が多くの州立師範学校や他の教育機関に設置されるに伴い，幼稚園協会の果たした役割は見落とされる憾みがあると指摘し，その重要性を強調する[2)]。そして，バンデウォーカーは「幼稚園進歩の歴史は，こうした協会が幼稚園だけでなく教育全般に対して与えてきた働きの記録がなければ，理解できないし完全でもない」[3)]のだと語っているように，アメリカにおける幼稚園改革運動はサンフランシスコの幼稚園協会から始まっていく。

幼稚園協会設立の牽引役となったのは，1878年７月23日に結成されたサンフランシスコ公立幼稚園協会（San Francisco Public Kindergarten Society）である[4)]。ニューヨークの倫理文化協会（Ethical Culture Society）の指導者アドラー（Adler, F.）は，貧困・犯罪・不衛生といった問題を抱える大都市に住む貧児の救済事業として，東海岸に設立され始めた無償幼稚園をロッキー山脈の西側にもたらした。アドラーの提唱に賛同し，協会の設立・運営に尽力したのが1870年，ピーボディの招聘によって来米したドイツ人幼稚園運動家，エマ・マーウェデル（Marwedel, Emma）とその弟子スミス（Smith, K. D.，後のウィギン）である。つまり，ピーボディ，教師養成に携わったドイツ人教師マーウェデル，そしてフレーベル主義幼稚園運動家ウィギン（Wiggin, K. D.）らの働きによって，形骸化した幼稚園教育改善の筋道が拓かれていく。

マーウェデルは1870年，ロングアイランドのブレインウッドに女子産業学校を設立した。翌71年，ワシントンに移ったマーウェデルは，産業芸術学校にドイツ語－英語幼稚園を附設し，フレーベルの教育哲学を実践的に応用した学校運営に乗り出した。しかし，ドイツ人に対する偏見によって，学校経営は困難を要し，毎年のように撤退・移転を繰り返していく[5)]。1876年，セベランス（Severance, C. M.）夫人の支援を得てロサンゼルスに移り住んだマーウェデルは，カリフォルニア・モデル幼稚園と太平洋モデル養成学校を開設した。この養成校の１期生が，サンフランシスコ公立幼稚園協会が９月１日に開設したシルバー・ストリート幼稚園の指導者，ウィギンである。マーウェデルの学校運営はここでも挫折し，オークランドさらにサンフランシスコへと移転の旅が続く。1880年，サンフランシスコに太平洋幼稚園師範学校を開設し，幼稚園と小学校などを付設するなど，順調な滑り出しではあったが，1886年には学校運営を断念し，講演と執筆活動に専念するようになった。

マーウェデルのアメリカでの生活は苦難の連続であった。しかし，マーウェデルは1893年11月17日，76歳で生涯を閉じる間際まで，フレーベル教育哲学の福音を伝えようと構想を練っていた。スウィフト（Swift, F. H.）は，こうした不屈の精神を持って歩み続けた彼女の生涯について，「マーウェデルのアメリカ幼稚園運動と進歩主義教育に及ぼした成功と貢献は，実利的な達成の観点からではなく，彼女が他者に与えた霊感やガイダンスの観点から計られるべきだ」と指摘している[6]。

スウィフトに従って，マーウェデルがアメリカ幼稚園運動に果たした業績を考えるなら，それは２つある。まず１つは，彼女のカリフォルニア州オークランドのマウンテン・ビュー墓地の石碑に刻まれているように，「太平洋海岸の開拓的幼稚園教員，フレーベルの忠実な伝道者」であった点にある。つまり，彼女はフレーベルの忠実な伝道者として幼稚園を東海岸から西海岸へと広めた開拓伝道者であった[7]。そして，２つ目には形骸化したフレーベル主義幼稚園の改革に及ぼした影響である。1887年，マーウェデルは『自覚的母性』（Conscious Motherhood）を出版する。彼女は本書で，「理想の育児室」や「裁縫・絵・紙細工等による幼稚園への示唆」といった形で，恩物至上主義がもたらした一斉画一的な保育形態から脱却する改革の視点を提示している[8]。

本研究は，この２つ目に注目し，フレーベル主義者マーウェデルが進歩主義幼稚園教師たちに与えた改革の視点を解明することを目的とする。こうした研究は，フレーベルの幼稚園教育理論からデューイの進歩主義教育への移行として語られてきた幼稚園運動を問い直し，フレーベル主義幼稚園運動家の働きを正当に評価することにある。

Ⅰ．問われるフレーベル主義幼稚園

形式化したフレーベル主義による機械的な保育を根底から問い直したのは，ケンタッキー州ルイスヴィルの幼稚園教師ブライアン（Bryan, A. E.）と弟子ヒル（Hill, P. S.）である。ブライアンが1890年の全米教育協会（National Educational Association）において行った「文字は人を殺す」という歴史的演説に始まる恩物批判が，幼稚園界の恩物崇拝を突き崩すきっかけになったと考えられている[9]。しかし，1878年に開設されたシルバー・ストリート幼稚園においてウィギンは，フレーベルの教材に文字通り盲目的に追従する，機械的で空虚なやり方を次々に改良し，喧嘩で泣きわめいたり，近所の火災報知器の音に飛び出したりしていくような子どもの実態に即した実践をすでに行っていた[10]。

こうした関連を念頭に置きながら，ここではブライアンら進歩主義幼稚園運動家や彼女たちに影響を及ぼしたホール（Hall, G. S.）のフレーベル主義批判を見ておく。

１．進歩主義幼稚園運動家らによる形式的な恩物教授法への批判

ブライアンが指摘したフレーベル主義批判の矛先は，アメリカ初の公立幼稚園を開設させたセントルイス市の教育長ハリス（Harris, W. T.）と指導者ブロー（Blow, S. E.）が推進してきた形式的日案（Uniform Program）に向けられた[11]。この日案は，フレーベルが恩物・作業，『母の歌と愛撫の歌』に示した模範的経験（pattern experience）と典型的活動（typical activity）を普遍的なものととらえ，アメリカ社会に育つ現実の子どもの生活や習慣を無視するものであった。加えて，ブライアンが問題にしたのは，幼稚園教師が恩物・作業さえ与えれば，子どもは創造的に思考すると信じ込んでいる点であった。教師の話は，「ブロックの動きをつなぎ合わせる説明にすぎず，子どもにいかなる思考も観念も発達させない。事実の列挙がいかに詳しくとも，子どもに与えるものは何もない。…子どもは創造的に活動するのではなく，機械的に動かされている」にすぎないと言う[12]。そして，ブライアンはこうした恩物を文字通りに与える，不毛で非教育的な遊びを，本来の創造的な遊びに生き返らせることができるのは，「魂を持った教師」自身なのだ，と厳しく主張した[13]。

シカゴ大学のテンプル（Temple, A.）もまた，フレーベル主義者たちの折り紙の指導を例にあげながら，その形式的な教授法への問題点を指摘している[14]。

クラスの子どもたちは各自１枚の色紙（４インチないし６インチ）を与えられ，それを机の上に置くように求められる。

教師は子どもたちに次のように，段階に応じて指示する。まず，「手前の辺に手を置きなさい。向こうの辺まで手前の辺を折り曲げ，折り目を付けなさい。手を止める前に，両方の辺が正確にあっているか確かめなさい」という課題が課せられる。特別な手の動きと正確な仕事が目標とされているため，多くの時間が費

やされる。もし，子どもが早く考えを実行しようとしても，辺が正確に合っていないなら，やり直しが命じられる。多くの場合，教師は個々の子どもたちの間を巡視し，援助する必要がある。また，早く折れた子どもたちも全員が折り終わるまで，手を膝の上に置いてじっと待っていなければならない。教師は全員が終了したのを確かめた後，次の指示を出す。

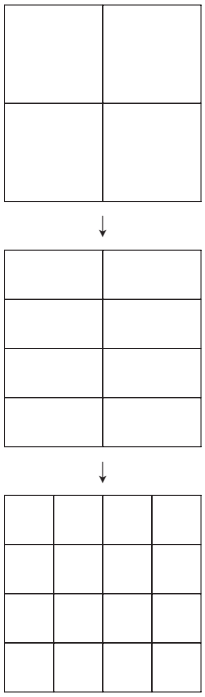
教師：さあ，あなたがたの紙を開いてごらんなさい。ジョン，あなたのは何ですか。メアリー，あなたは何を持っているのですか。

ジョンもメアリーも全く答えられない。教師はさらに次のように説明を続ける。

教師：私は本を持っています。皆本を持っていますか？　さあ，皆の本から「おはよう」の歌を歌いましょう。

この歌を歌い終えると，今度は子どもの希望した歌を歌い，さらによく知っている詩を本を使って読む真似をする。子どもたちはさらに折り紙が本以外の何かに見えないか質問される。スクリーン，テント，水槽にその類似点を見出すことが期待される。教師はこうした対象に見立てて遊びを指導する。

翌日また本が折られ，遊びが繰り返された後，新しい折り方が導入される。「左辺を右辺に折り曲げ，折り目を付けなさい。紙を開きなさい。何を作ったのですか？」と，教師は前日と同じ質問をする。子どもたちは誰も何を作ったのかわからない。そこで教師は自分の折り紙をモデルに窓と命名し，その不透明な窓から見たことについて話す。子どもたちも，見たことを話すように求められる。こうした質問は，「想像性の訓練」になると考えられていた。



基本形までの過程

３日目，子どもたちはさらに２つの折り方を教えられる。これは食器棚，テーブルに例えられ，一連の折り方は16個の正方形ができるまで続けられる。これが折り紙の「基本形」となり，いろいろな形の原型となる。

ブライアンやテンプルらが指摘するように，作っている物がまったくわかっていない子どもたちにとって，教師の指示は機械的，強制的介入にすぎない。機械的な指示は子どもたちに不毛で非教育的であって，子どもたちの想像力や思考を促すとは言い難い。

教師が子どもに示す示範・説明は，子どもが①注意を覚醒し，②観念を整理し，③意思を実行するという自己活動のモデルになる，というのがブローの考えであった。ブローは言う。

「幼児の精神は，ぶつかり合う感覚によって悩まされ，感覚はぶつかり合う衝動の戦場と化している。それゆえ，教師が示す模範的活動は，さまざまな対象に向けられた幼児の衝動を，ある特定の対象に絞り，衝動発散の道を与える。そして，それは子どもを無意識的で自発的な活動へと導く手段であり，こうした自発的な活動が達成され，人格形成と認知レベルの向上がもたらされた後，子どもに自由な活動が許されるべきだ」と[15]。

フィンケルステイン（Finkelstein, B.）の言葉を借りるなら，ブローは学校としての幼稚園を強調し，社会化の重要な場と捉え，教師を熟練した介入者・再調整者であると見なしていた[16]。したがって，子どもから自己活動を引き出す教育的な助産婦としての教師の意味合いは薄く，教師と子どもの共同作業としての指導過程は，教師の一方的な問いかけの繰り返しと化す危険性を孕んでいた。

２．ホールのフレーベル主義批判

ホールは1895年，シカゴで開催された国際幼稚園連盟の会議に乗り込み，ブローとの対決を挑むが，出席者35名の内，ブライアンとヒルを除く33名が退席するといった露骨な反発に遭った[17]。しかし，1900年に発表した「アメリカの幼稚園が持つ幾つかの欠点」において，ホールはブローら保守派によって歪められたフレーベルの精神を救い出し，「私はフレーベルの真の弟子であり，私の説はもしフレーベルが今シカゴやボストンに来たならば彼も承認するように，真に正統な説であることを主張しておきたい。」と自信を持って改革の視点を主張している[18]。

まず，ホールは次の７点から，フレーベルの教育界に対する功績を称えている[19]。

①フレーベルは子どもの発達における要約的発生説を，発生学に先んじて唱えた人物である。

②感情と本能が，知性と意志の根源であると説いた。

③創造的な遊びが子どもの興味・能力の発達を見る指標であり，効果的な教育手段となり得ると考えた。
④汎神論に基づく諸概念を教育に適用した。
⑤人間本来の善性と健全性を信奉し，カルヴィニズムの原罪説的子ども観[20]を後退させた。
⑥子どもの各発達段階における固有の標準を認め，重んじた。
⑦われわれが子どもと共に生きなければならないと教えた。
⑧外圧的な教育方法を退け，直観や無意識を信奉した。
⑨健康こそがすべての基礎であるとして重視した。

その一方で，ホールは①フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』への信奉，②恩物・作業への盲目的な崇拝，③健康への無配慮という３点に批判の目を向けている[21]。『母の歌と愛撫の歌』を構成する詩・音楽・絵は生硬かつ平凡で，子どもにとって有害とは言えないまでも，教師に反科学的かつ非哲学的な知的習慣を植え付けるものだと指摘する。また，幼児期という年齢は「動物に対する子どもの興味が頂点に達する時期であり，子どもの性格が科学的な興味ばかりでなく道徳的な示唆をも孕んでくる時期である」[22]にもかかわらず，恩物・作業への盲目的な崇拝が動かない対象と数学的な諸概念に子どもたちを追い込み，細かい作業は子どもたちを疲労させていると主張する。そして，衛生面への配慮のなさが最も深刻だと述べ，伝染病対策，採光と保温対策，トイレの状態と使用方式，神経全般の衛生などの問題を列挙しながら，痛烈な非難を浴びせている[23]。

そして，ホールはこれら問題点を改革するための具体的対策として次のような５点を提示している[24]。

①身体面の重視：手や眼の緊張の軽減，ダンスの教育的活用，大型積み木の使用，掴む・投げる・運ぶ活動や「私がする通りにやってごらん」など模倣活動の導入。
②遊具や保育内容の改善：人形の活用，コマやシャボン玉，多様な積み木やカード，動植物など。特に，動植物について，ホールは「動物に対する子どもの興味は花や樹木に対する興味よりも前に絶頂となり，花や樹木に対する興味は無生物に対する興味より前に頂点に達することを念頭に置いて，動植物との可能な限りの接触が注意深く実験されるべきだ」[25]と主張している。
③言語教育の向上：教師の発声や言葉使い，英語の正確さと言語学への造詣の豊かさ，語彙を豊かにするための絵や実物の提示。その具体的な方法は，「やったことや見たことすべてが言葉で説明される。しかも，それは幼稚園に広く見られるような馬鹿げた一斉活動においてではなく，子ども一人ひとりとの自由で，個人的な対話において為されるべきだ」とホールは付加する[26]。
④神話・伝説の導入：グリムやイソップ，旧約聖書・ホメロスからの物語などによる語り聞かせの重視。
⑤音楽教育の重視：自然や神,家庭や国にまつわる古いバラードや歌が感情教育にもたらす意義,詩の鑑賞など。

ここで注目されるのは，ホールが身体を使った活動例とした指摘した「私がする通りにやってごらん」である。この遊びは，マーウェデルの弟子，ウィギンが生涯忘れられない，彼女の幼稚園で学んだ「小さな教師」だと考えられる。これは新しい仲間と手を取り合って輪になり，一人の子どもが中央に出て自由な動きをする間，「小さなハリー（子どもの名前）を見てごらん。私たちに何をするか見せてくれるよ。小さなハリーを見てごらん。さあ次は，私たちが同じことをしましょう。」と手拍子に乗って歌いながら，輪の子どもたちも同じ動作をする単純な遊びである。誰にも出し抜かれたくない理由で教師を名乗り出たエドガーと，演劇センスを備えたバーサによる対照的な例が示されている[27]。

エドガーの野心は達成できたが，彼はどんな動きをするかなど考えていなかった。そこで，マーウェデルが彼の側に行って，ヒントを与えた。４，５歳の少年は足を上げたり下げたり，腕をあちこち振り回すこと以外に思い浮かばず，この年齢の自己表現はとてもリズムカルであるとか，美的であるとは言い難いものであった。マーウェデルは腕を時計の振り子のように動かすようにアドバイスを与え，ウィギンら輪の子どもらもそれに倣った。それから，エドガーは次の教師をサークルの中から指名するように言われた時，「もう一方の腕で違う動きができる」と不満をもらした。

ゲームは子どもたちの喜びの内に進行し，バーサが教師に選ばれた時，ついに奇跡が起こった。バーサは頭も良く，演劇センスも備えていた。彼女は自分の白いスカートを両手で少し持ち上げ，幅一杯にまで広げて，曲の最初の小節で体をゆっくりと沈め，完璧に膝を曲げてお辞儀をしながら，次の小節のところで体を起こした。この演出効果は魅力的かつ電撃的で，マーウェデルの涙を誘った。輪になっている私たちも急いでその動きに倣ってお辞儀をしたが，男児たちは足を突きだし，幾分男性的にやろうと試みた。また，女児たちは両足をすり合わせ，さまざまな方法で頭を上げ下げするなど，鋭い胃痛を味わっているような格好で

あった。地面に倒れ込む子さえ出る始末で，英国宮廷にふさわしいお辞儀ができる者は誰一人としていなかった。

バーサの外観の優雅さに近づくには，私たちは余りにも不器用で，何度となく反復する必要があった。そして，私たちはゲームを終えるまでに，女性がお辞儀する時，仲間の若い男性たちが為すべきお辞儀の方法を教えることになった。

ウィギンの記録は，最初に躍り出たエドガーと奇跡を起こしたバーサとの際だった動きの違いを対比しながら，優雅なバーサの動きに近づこうとするために，お辞儀の仕方を学ぶきっかけとなったことを明記している。そして，ウィギンはこの遊びが単調な歌詞で，想像力を刺激するものではないと思ったが，見知らぬ子どもたちに集団の一員としての意識を喚起したり，ある共通した活動へと統一したり，リズムや時間の感覚を発達させるのに効果的な手段となることを理解したと述べている[28]。

マーウェデルが1876年に開設した幼稚園の実践や養成校での講義は，ウィギンが自伝で明らかにするように，その英語力や体系性の欠如した話し方から，ウィギン以外の２人の生徒を満足さえられなかったようである。マーウェデルは理想家，夢想家，預言者であり，その足はまるで地に着いていなかった[29]。こうした問題点から，ベルテやクリーゲらドイツ人幼稚園運動家が収めた実利的な成功は得られなかったが，ウィギンやクーパー（Cooper, S. B.）ら想像力豊かで，崇高な精神を追い求める女性たちに霊性と果たすべき働きへのガイダンスを与えたのである。

Ⅱ．フレーベル主義者マーウェデルの幼稚園開拓伝道

マーウェデルは『自覚的母性』を通して，子どもたちが個々の権利として秘めている可能性を発展させるには，女性たちが自ら母性を訓練し，幼稚園にかかわる教育哲学や方法論に精通する必要があると唱えた。マーウェデルは，女性が無知で，依存的な存在に止められている原因は，「本能的な母性が完成され，十分なものと受け入れていることの誤り」にあると主張した[30]。

こうした母性のとらえ方は，フレーベルが幼稚園の設立に向けて訴えた，不自然に分離された女性と子どもの根源的合一を家庭に復活させようとするドイツ母性主義フェミニズムに基づくものであった[31]。ちなみに，フレーベルの姪であり，ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの指導者，シュラーダー（Schrader–Breymann, H.）は，「温かい愛情でわが子を包んで保護するという資質は家庭内だけでなく，社会でも必要とされており，したがって母親が家庭内で果たしている役割をそのまま社会にもちこんで多数の子どもたちの教育に役立てることもできるし，自分の子どもを産んでいない女性も母性的資質を社会のなかで発揮することは可能だと考えた。彼女はこのような試みを，わが子の出産と育児という『身体的母性』と区別して『精神的母性』と表現し，母性的資質の発揮という課題は男性には代替不可能なものであり，女性特有の活動分野が社会のなかに存在すると主張した。彼女は，女性を家庭内に封じ込める役割を果たした母性を社会進出の足掛かりとしてとらえ，これによって女性に職業への道を開くとともに，保母や幼稚園の教師など社会教育的な分野で女性の職業を作り出した」ことによって，ドイツのフェミニズム運動の立役者と賞せられている[32]。

ドイツでは1870年から1910年にかけて，急激な工業化が進み，それに伴う問題が出現し始めた。農林水産業従事者と鉱工業部門の従事者数は1895年には同数となり，以来逆転傾向を辿ると共に，工業化は1871年にはわずか８つにすぎなかった10万都市を，1910年には32へと急増させた。農村からの移住者が相次ぎ，1850年には42万人であったベルリンの人口は，1880年には112万2000人，1910年には207万1000人へと膨れあがった。工業化に伴う無計画な都市化は，劣悪な住居環境を生み出し，婚姻外出生率の上昇や性モラルの低下，疾病の温床といった社会問題を引き起こし始めていた[33]。

フレーベル主義幼稚園はこうした社会問題の出現とともに，大都市の貧児救済の役割を担うことが求められていく。ここでは，ドイツ母性主義フェミニズムの流れを汲む，マーウェデルがサンフランシスコにおいて展開し始めた母性主義フェミニズムの実態とフレーベル主義幼稚園改革の視点を明らかにしたい。

１．自覚的母性の育成と理想の育児室

マーウェデルは「母親が自らの妊娠を知った時から，産まれてくる子どもの教育を始めるべきである。あらゆる人が信じているように，もし母親が体内の子どもを忌まわしい疎ましさや，逆に感覚に与えられる突然の感銘

によって特徴づけるなら，母親は常に繰り返し高まる感覚を通して子どもの身体と精神の釣り合いや美を形作るのかもしれない。」と，胎教の重要性を指摘した[34]。そして，母親は自らの力を注意深くかつ良識的に利用して，子どもの性格をしつけるべきであるが，そのための最も貴重な人間性の１つが，自制心であると言う[35]。

また，マーウェデルは英国の少年非行が学校体系の改革によって，激変した背景には，女性たちが男性と共に，社会問題の解決に参加し，意気向上に果たした功績を指摘する。禁酒運動や幼稚園運動における女性の働きも注目され，「フレーベルによって組織された幼稚園は，単に慈善的な価値だけでなく，その教育的な価値が認められるようになってきた。そして，有能な教師によって，その偉大な人道的精神がもたらされるなら，幼稚園は人間性における基本的洞察を通して主要な教育の出発点となりうる」に違いないことを実証しようとしたのである[36]。

そのために，マーウェデルが行ったことは，フレーベルの教育理論と実践を，イェナ大学の生理学ならびに心理学の学科長であるプレーヤー（Preyer，W.）の実践的，心理学的，教育学的観察によって補足し，現代の人類学的かつ道徳的要求を満たそうと試みた。マーウェデルはフレーベルの教育理論と実践を次のように説明している。フレーベルは植物に見られる自然の法則を人間に適用し，子どもの成長における発達的方法論と見なした。この統一的な力の知覚は，子どもが全体の部分として，さらにその部分の全体として存在すべきであるという感情的，知的活動を通して完全な人間性へと高められていく。より高次な統一の中に，心理的のみならず，道徳的発達を予見した点に，フレーベルの教育理論の独自性がある。そして，マーウェデルは「私たちの生活には様々な多様性が存在するが，私たちの時代における理想のスローガンは『統一』である。身体と精神の統一；法律，責任，労働，期待と不安の下での統一と平等；完全と向上の統一；自然と人の統一であり，こうした統一が私たちの時代の道徳的，教育的，宗教的解決策」なのであると力説した[37]。彼女がこのように統一を力説するのには，ギリシャ人が「自由人」にのみ，最も高い美徳を認めていた時代から遥か2000年が過ぎ，文明はどんどん進んだにもかかわらず，母として，教師として，子どもの霊性や性格形成に携わっている女性たちには依然，自由が与えられていないことに問題の原因があったからである。女性たちが合法的に自らの子どもたちに対して独立し，責任のあることを認められる必要がある。マーウェデルの主張はこの点にあった[38]。

では，自覚的母性を持った母親とは，どのような母親であり，そのために女性たちに求められる訓練とはどのようなものなのだろうか。自覚的母性は，母親が子どもに秘められた可能性を最大限開花させ，その発達を促進させるためには不可欠である。マーウェデルは感覚教育の必要性から，５種類の揺りかごから始まる感覚遊びを提唱しているが，これらは母によって子どもに適用され得る１番のこと，つまり，視覚，色の感覚，形の感覚の発達という３つの教育的要素が含まれていた[39]。さらに，フレーベルのボール遊びも部分的に改良された。こうしたボール遊びは，家庭の絆に対する深い情感と歓喜溢れるものであって，課業ではない。したがって，次の２つのことが重視される。まず第１に，動き，語り，歌が完全でリズミカルな旋律を保つこと。第２に，優れた歌が本質ではあるが，話もまた同様に重要であること，の２点である。遊びは創造的な傾向と衝動に依存し，自由に生まれるのであって，強制されるものではない。図解に添えられる韻文はどこから集められてもよいが，音楽は名高い作曲家やサンフランシスコから生じたものであることが重要だとマーウェデルは考えていた。フレーベルは第１恩物，毛糸の球体を果物，野菜，花，種，葉，卵に見立てるのに対し，マーウェデルはゴム，磁器，紙張子から出来た林檎，桃，梨，花，野菜などの玩具を与え，知覚や比較の力を発達させる必要性を唱えた[40]。

さらに，マーウェデルは「理想の育児室」において，彼女が考える子どもに与えられるべき自然物，単純な玩具，適切な図書などの環境整備と共に，そこでの子どもたちの経験について詳細に語っている。「理想の育児室」には，子どもたちが世話をする花壇に加え，さまざまな小動物が飼育され，魚が泳ぎ回る池さえ備えられている。動物が子どもを生み，雛が孵るのを子どもたちはつぶさに観察することができる。育児室のマットレスを敷いた場所が赤ちゃんコーナーである。その周りを取り囲む柵は，歩き始めた時に掴む手すりとなる。柵には聴覚を発達させるのめの小さなプレートが吊り下がっている。赤ちゃんがガラス，磁器，木，厚紙，鉄，ブリキ缶からできたプレートをスプーンやボールで叩くと，違った音が聞えてくる。赤ちゃんがその違いに気づくように，聴覚を刺激し，発達させることが重要なのだとマーウェデルは説明する。また，育児室の一角にある玩具コーナーには，小さなボールと輪，動物と馬小屋，玩具のリンゴと桃などを入れた小さなバスケットが置かれている[41]。さらに，動物，ギリシャの寺院や家などの絵に加え，アンデルセンやグリム，イソップ，動物寓話などの読み物が備えられ，子どもたちに読み聞かせる母親の姿が見られる[42]。

2．フレーベル主義幼稚園改革の視点

マーウェデルによるフレーベル主義改革の視点は，①自制心や道徳性の育成，②人やモノとの対話的関係，の２点に集約することが出来る。子どもたちはマーウェデルが育児室や幼稚園に整えた対象である人やモノと徹底的に対話する中で，必要な知識や人間性，正しい価値を自ら生成していく。こうした意味ある存在としての子どもたちが砂場に展開する自制心と道徳性から見ておこう。

⑴ 自制心や道徳性の育成

マーウェデルは自制心や道徳性を育成する場として，砂場（sand table）を重視した。アメリカにおける砂場の起源は1885年夏，マサチューセッツ州緊急対策及び衛生協会（Massachusetts Emergency and Hygiene Association）がボストンのパーメンター街の礼拝堂の庭に設置したのに始まる。犯罪の温床ともなっていたボストンのスラム街に設置された砂場は，子どもたちの健全育成を目指すものであった。近隣の路上にさまよう４歳から10歳児15人ほどが近所の女性が見守る中，砂を小さな木のシャベルで掘り，歌を歌い，行進したりして遊んだ。これを契機に始まるプレイグラウンド運動は，ブライアンやヒルらによるフレーベル主義幼稚園改革運動に影響を及ぼしながら発展していく[43]。

マーウェデルが紹介したサンフランシスコの無償幼稚園における実践は，上述したように，アメリカにおけるプレイグラウンド運動が始まったばかりであり，砂場での設備や活動内容が模索されている段階であったことを考え合わせるなら，活動がきわめて整然と展開していることに驚きを覚える。この実践は，ボストンのように自然の中でなく室内での砂遊びだということ以上に，子どもたちが「格調高い家」を６週間という期間をかけて組み立てるといった計画的かつ協働的な活動を展開している点で注目される[44]。

> 砂場は最も興味あるものであるばかりでなく，子どもをより高い道徳的な段階へと導くことで，幼稚園の最も教育的な目玉商品である。そして，子どもはこの段階から社会的な集団の一員となり，かなり早い時期に個人として他者の作品を尊重し，自己愛に打ち勝つことを学ぶのである。子どもは教師の指導の下，部屋の彫像，通りや公園，何でも好きなものを作るように言われる。さらに，子どもは人の生活が庭に始まり，耕して，それを管理することだと告げられると，砂にエンドウや亜麻の種を蒔き牧草にすることにした。小さな種を温めるように砂をかぶせ，毎日水を撒いて，発芽するのを楽しみに観察を続けた。
>
> ある日，緑の若葉が芽を出し，週末には牧草となった。子どもたちはその様子を喜び，家と納屋を組み立て，歩道と車道を作った。子どもたちは一人ひとり，家や納屋の一部を作った。本物を模して，レンガで出来た家はその色も含めてブリストル厚紙で作られた。屋根は灰色と栗色で作られ，石板のようにマットを織った。ドアと窓も本物らしく灰色のブリストル厚紙で縫って作った。壁はブリストル厚紙で本物の石に真似て作り，苔で全体を覆った。小さなバスケットは板を鎖で繋いで作った。この仕事は，６週間続き，興味が続く限り，家・納屋・美しい庭の部分について教えを請うた。歩道は小さな貝殻で覆い，石庭は子どもたちが集めた石で作り，その上にはシダがかぶせられた。彼らは休み時間になっても，席に止まり「格調高い家」を完成させることを望んだ。子どもたちは寛大さを共有し，優美さを受け入れ，礼儀正しく社会的訓練に従うことを学んだ。これが幼稚園の最も重要な特徴の１つである。全体を通して，子どもは無意識のうちに，創造された者から創造者へと導かれていく。

子どもたちはまず，自分たちの周囲にある好きなものを作るように言われる。次に，田を耕し，作物を収穫して営まれる人の生活がこの砂場において展開される。砂場に蒔いた種が芽を出すと，子どもたちはそこに人の生活を支える住環境を整えていく。子どもたちが砂場での活動に引きつけられたのは言うまでもない。

マーウェデルらの工夫はこれだけではない。毎週金曜日には，訓練校の幼稚園教師が順に，砂場を使ってお話を展示する。あらゆる種類の動物，木々，馬車，家，小さな人形がお話に登場するだけでなく，子どもたちの創造的なインスピレーションを喚起させるような空き箱も加えられた。こうした展示物は子どもたちに対象物への関心を拡大させていく。そして展示が終わると，子どもたちはその対象物をもとの場所に，数を確かめながら戻す責任を担う。子どもに委ねられた責任は，秩序ある生活習慣を身に付け，正直に行動する自制心を育む機会となった。もう少し，丁寧に説明すると，子どもたちは毎週，羊飼い，庭師，御者，乳母と呼ばれる役割を任命される。その役割はいろいろな種類の動物，木々，馬車，家と人形などを，責任を持ってもとあった整理ダンスの引き出しに戻すために付けられた当番名であり，男児が乳母に任命されこともあった。そうした場合でも，子ど

もたちは愉快に引き受け，向上心を高めた。とりわけ，動物たちを養い育てる「羊飼い」という名称は，大人のインスピレーションを生み出すだけでなく，子どもたちにとって，魅力的な効果をもたらした。子どもたちによる強い想像力は，彼らのより高次なインスピレーションの源を育むこととなった[45]。

サンフランシスコの幼稚園における砂場での保育実践は，プレイグラウンド運動がようやく緒についたばかりのアメリカの活動よりも，ホールが高く評価している，子どもの主体的な活動や創造性を育てようとするシュラーダーがペスタロッチ・フレーベル・ハウスの砂場において展開した活動に近いものであった[46]。

⑵　人やモノとの対話的関係

マーウェデルが子どもたちの自制心や道徳性を育むために重視したのが，子どもが人やモノとかかわる中で体得する対話的関係である。子どもたちは母親や教師たちと横並びになって，じっくり人やモノと対話し，その思いや考えをゆっくり聞き取られる経験を積んでいく。これが，教師と子どもの共同作業としての指導過程が教師の一方的な問いかけの繰り返しと化す危険性を孕んでいた先の折り紙の指導とは異なる結果を生み出す。人形から始まる話し合いを見ておこう。

幼稚園教師はまず，子どもたちの好奇心を引き出し，問題意識を持たせるために，すべての人形をその小さな母親である子どもたちの隣に座らせ，お話の読み聞かせを始める。人形は眼が開閉し，頭・腕・足も動き，口やキーキー泣く声さえ上げられるのに，お話がどんなに素晴らしくても，笑ったり，手を叩いたり，席から飛び上がることはできない。ここで，教師は子どもたちに「お人形はみんなに似ているのに，なぜみんなのようにしないのかしら？」と質問する。話し合いは次のように展開していく[47]。

一人の男児：本物の髪，本物のイヤリングを付けた人形もあるし，汚くなったら洗われなければならない。それに「ママ」と言えるし，人形も人間も全く違いはないと思うよ。

ジョージ　：人形は赤ん坊の僕の妹よりも優れているよ。だって，妹は話せないし，歯もないから。

みんなはジョージの話を聞いて笑った。人形は生きていない。世界中のどんな器用な人も，モノに命を与えることはできない。しかしこの結論は，翌朝のジャイルの発言で覆った。

ジャイル　：植木鉢・土・水さえあれば，命は与えられるよ。これはクサキョウチクトウになります。ケシになります。これは豆になります。

ジャイルの行動と大声による宣言は，みんなの興味を喚起し，幾つかの小さな袋から種を蒔くのを丸くなって観察する思いにさせた。しかし，命の芽が出るまで待てなかった。ジャイルは種が必要とする土や湿気，太陽の温かさを与えることはできても，種の内部に秘められた驚くべき力がなければ命を与えられないことに気づいて当惑した。

ジャイル　：種は発芽してくる芽のお母さんで，植物の赤ちゃんも人間の赤ちゃんも差はないよ。だって両方共，だんだん大きくなるし，食べたり飲んだりする。温かくないとだめだし，お父さんとお母さんがいる点でも同じだからね。

アーサー　：子猫や子犬の方が人間の赤ちゃんに似ていると思う。だって，泣いたり，動き回ったり，お母さんが好きだもの。

ミニー　　：子猫や子犬は人間の赤ちゃんとは全く違うよ。だって，人間の赤ちゃんは猫のように，生きているネズミを食べたりしないし，犬のように骨を砕いたりしないよ。

こうした子どもたちの話し合いはまず，子どもを教師から知識を注ぎ込まれる容器と見なしていない点で，折り紙の指導とは対照的である。ジャイルの突飛な行動が特に面白い。人間はモノに命を与えることはできないという結論を覆したのはよかったが，植木鉢に蒔いた種が芽を出すまで待てるはずがない。しかし，ジャイルは怯むことなく，種と芽の関係を母子関係に見立てていく。その姿は周囲の環境に働きかけ，自分自身で意味を作り出す存在そのものである。こうしたジャイルの行動は，みんなの興味を引きつけ，関心を持続させる契機となった。母親や教師が子どもの思いや考えを丁寧に聞き取ることは，子どもたち同士が相手の思いを聞き取ることに重きを置く姿勢を学び取らせていく。つまり，子どもたちは母親や教師によって自分の思いを丁寧に聞き取られる体験をするからこそ，相手の思いを聞き取ることを大切にできるのである。

さらに，マーウェデルは殆ど似ていないと思われる対象物を比較させながら，子どもの観察力，思考力を育む方法を明らかにしている。ヘチマと桃の比較を例にとろう。1個ではなく，半分のヘチマと桃の比較が課される。

最初，全く違っていると判断した子どもたちも，注意深く見ることによって，表１に示したように，多くの特性を発見していく[48]。

表１　ヘチマと桃の比較

類似点	相違点
①両方とも作物である。 ②両方とも果実である。 ③両方とも小さいものから大きいものへと成長していく。 ④両方とも皮がある。 ⑤両方とも土から栄養分をとっている。 ⑥両方とも本体の中央に種を持っている。成長し始めた時，栄養分になるものが種の周りにある。 ⑦丸い。これには２人から反対意見が出された。 プレスコット：桃はボールのように丸いが，ヘチマは円柱のように平面である。 マリオン　　：円柱は平面だけど，半分のヘチマは幾分へこんでいるし，半分の桃は種がある中央が膨らんでいる。	①形が違う。ヘチマは完全に円形だが，桃は茎の部分に小さなへこみがある。 ②色が違う。ヘチマは黄色だが，桃は黄色，赤色，緑色といろいろな色のものがある。 ③内部構造が違う。ヘチマの内部は筋や植物繊維で占められている。しかし，ぎっしり詰まっているわけではない。桃の内部は豊かな果汁や小さな穴からなる果肉でぎっしり詰まっている。 ④ヘチマは食べられないが，桃は魅力的な食べ物である。私たちは子ども病院に入院中の子どもたちのお見舞いに持っていく。 ⑤ヘチマは味がない。桃は実に甘酸っぱくて美味しい味がする。パパがとても大好きな果物である。 ⑥ヘチマの皮はむけないが，桃の皮はむける。 ⑦ヘチマは沢山の種があるが，桃は１つである。 ⑧ヘチマの種は容易に壊れるが，桃の種はできない。 ⑨ヘチマは索状のツルで育つが，桃は木になる。 ⑩ヘチマは葉が散った後，黄色の花が咲く。桃は葉の前にピンクの花が咲く。 ⑪ヘチマは毎年新たに植えられないとできない。桃は同じ木が数年間実をつける。

相違点③で，アールが「小さな穴」に異論を唱えた。５歳のアールは「私たちは今後，それらを穴とは呼ばない」と断言すると共に，「それらは細胞であり，ミツバチの巣の部屋のようなものである。ただし，虫眼鏡がないので，私たちは桃の細胞壁を見ることはできない」と付け加えた。アールの桃の細胞を見るには虫眼鏡が必要だという主張は，子どもたちの興味・関心を対象物だけでなく，情報収集の手段や分析方法にまで拡大していく[49]。

ところで，こうした人やモノとの対話的関係は，マーウェデルがプレーヤーの意志形成と感覚との関連性から新たに開発した感覚遊びでのやりとりから開始される。プレーヤーによる，感覚が発達するにつれて，子どもの意志ある行動が芽生えてくるという事実を検証する観察手法はマーウェデルに大きな影響を及ぼした。マーウェデルは，子どもがほんのかすかな感覚から明確な認識を獲得していく過程を観察する中から，子どもが秘めている可能性を開花させる重要な役割を担う母親や幼稚園教師について説き明かしたのである[50]。

おわりに

1887年に出版された『自覚的母性』を中心に，マーウェデルが提唱するサンフランシスコの無償幼稚園での実践や，形骸化したフレーベル主義幼稚園改革の視点を見てきた。マーウェデルは，子どもに秘められている可能性を引き出し開花させるには，子育ての責任者である女性たちの母性が，幼稚園の教育哲学と技術において訓練される必要があると論じた。本書を通してマーウェデルが提言した①自制心と道徳性の育成，②人とモノとの対話的関係，という２つのフレーベル主義幼稚園改革の視点は，女性たちが子育ての本質を理解し，指導するための方法であり，その考えは今なお遜色ないものである。フレーベルの教育理論と実践を，プレーヤーの実践的，心理学的，教育学的観察によって補足することによって，子ども一人ひとりの可能性を解明し，知的ならびに道徳的要求を満たそうという彼女の試みは，概ね成功したと言ってもよい。

児童研究運動と幼稚園運動の接点はホールが調査を実施した1880年から続いていた。ホールの調査自体，ピーボディに触発された実業家の妻であるショー（Shaw，P. A.）が支援したボストンの無償幼稚園教師らの助力な

しに，成功はなかったのである[51]。1895年，ブローとの対決に破れたホールが，1900年の論文においてフレーベルを「児童研究運動の明けの明星」と呼び，発生的心理学の先駆として位置付けている背景に，本書の影響があったと言っても大きな間違いにはならないだろう。本書はその序に書いているように，ホールやピーボディらに捧げられたものであり，ホールがその内容に熟知していても不思議ではないからである。

マーウェデル，ウィギンらに代表されるサンフランシスコの幼稚園協会の実践を明らかにすることは，フレーベルの幼稚園教育理論からデューイら進歩主義教育への移行として語られてきた幼稚園運動を問い直し，フレーベル主義幼稚園運動家が求め続けた人間性，価値観を正当に評価することに他ならない。

注

1）阿部真美子・別府愛・滝沢和彦・菅野文彦・W.H. キルパトリック他著『アメリカの幼稚園運動』明治図書，1988年，３頁。

2）Vandewalker, N. A., *The Kindergarten in American Education*, Macmillan Co., 1908, pp. 55－75.

3）ibid., p. 55.

4）Smith, K.D., *Report of the San Francisco Public Kindergarten Society for the Three Years ending Sept. 1st, 1881*, 1881, p. 5. この時期，スミスはウィギンの結婚前の姓である。

5）マーウェデルの伝道の旅路については，拙著「幼稚園教員の専門性としての共感 —— エマ・マーウェデルの保育と幼稚園教員養成の実際をてがかりに ——」『鳴門教育大学研究紀要』第24巻，2009年，２－４頁を参照。

6）Swift, F. T., “Emma Marwedel, 1818－1893 : Pioneer of the Kindergarten in California,” *University of California Publications in Education*, Vol.6, No.3, 1931, p.p. 139.

7）ibid., p. 179.

8）Marwedel, E., *Conscious Motherhood ; or the Earliest Unfolding of the Child in the Cradle, Nursery, and Kindergarten*, D. C. Heath & Co., 1889.

9）Bryan, A. E., “The Letter Killeth,” National Education Association, *Addresses and Proceedings*, 1890, pp. 573－581.

10）Wiggin, K. D., *My Garden of Memory : An Autobiography*, Houghton Mifflin Co., 1923, pp. 116－118. Wiggin, K. D., *Children’s Right : A Book of Nursery Logic*, Houghton, Mifflin Co., 1892, pp. 64－67.

11）Hill, P. S., “Some Conservative and Progressive Phases of Kindergarten Education,” *The Sixth Yearbook of the National Society for the Scientific Study of Education*, PartⅡ, University of Chicago Press, 1907, pp. 68－69.

12）Bryan, op. cit., p. 575.

13）ibid., p. 576.

14）Parker, S. C. & Temple, A., *Unified Kindergarten and First–Grade Teaching*, Ginn and Co., 1925, pp. 256－258.

15）Blow, S., *Letters to Mother on the Philosophy of Froebel*, D. Appleton& Co., 1899, pp. 49－50.

16）Finkelstein, B., “Introduction,” in Finkelstein, B. (ed.), *Regulated Children/Liberated Children : Education in Psychohistorical Perspective*, Psychohistory Pr., 1979, p. 8.

17）Shapiro, M. S., *Child’s Garden : The Kindergarten Movement from Froebel to Dewey*, Pennsylvania State University Press, 1983, p. 119.

18）Hall, G. S., “Some Defects of the Kindergarten in America,” *The Forum*, 28, Jan.1900, p. 579.

19）ibid., p. 580－581.

20）カルヴィニズムの原罪的子ども観に立脚した宗教教育は，父親の厳格な罰によって子どもの自律性を抑圧し，意志を挫くことを強調していた。1830年代に顕著となる子ども観・女性観の変化は，植民地時代のカルヴィニズム的子ども観を支えた家父長制度が工業化に伴って崩壊し始めることによって進められた。子ども観の転換は，子どもに外的服従ではなく，内面的，自発的服従を求めるようになる。女性の直観と感性が子どもの性格形成にもたらす影響力を強調するフレーベルの考えは，女性が教育に果たす役割を大きく推進していく。

21）Hall, op. cit., pp. 585－587.

22）ibid., p.586
23）ibid., p.587.
24）ibid., pp.588－590.
25）ibid., p.588.
26）ibid., p.589.
27）Wiggin, My Garden of Memory, op. cit., pp.94－95.
28）ibid., pp.96－97.
29）ibid., p.98.
30）Marwedel, op. cit., p.24.
31）ドイツの母性主義フェミニズムと幼稚園教員の養成については，拙著「ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの教育実践と母性 ―― 家庭・地域社会の教育力再生の視点から ――」『鳴門教育大学研究紀要』第23巻，2008，111－113頁参照。
32）姫岡とし子『近代ドイツ母性主義フェミニズム』勁草書房，1993年，25頁。
33）Allen, A. T., *Feminism and Motherhood in Germany, 1800–1914*, Rutgers University Press, 1991, p.111. 姫岡，同上書，50－53頁。
34）Marwedel, op. cit., p.41.
35）ibid., p.42.
36）ibid., pp.56－57.
37）ibid., p.84.
38）ibid., p.223.
39）ibid., p.112.
40）ibid., pp.170－175.
41）ibid., pp.227－229.
42）ibid., p.241.
43）プレイグラウンド運動の詳細については，拙著「アメリカ進歩主義幼稚園の改革運動と＜砂場＞」『鳴門教育大学研究紀要』第21巻，2006年，83－87頁参照。
44）Marwedel, op. cit., pp.268－269.
45）ibid., p.271.
46）笠間浩幸『＜砂場＞と子ども』東洋館，2001年，92－97頁。この箇所は，アメリカのボルチモア出身の女性がシュラーダーに宛てて書いた砂場の質問とシュラーダーによる回答の翻訳部分である。シュラーダーは，砂場での遊びにおいて，「遊び道具は子どもたち全員にいきわたるように沢山なければならないが，20人の子どもたちにいろいろな種類，それぞれ20個の道具が必要なわけではない。それは交代で使われるし，そうすれば仲良しになれるというすばらしい教育手段にもなる。子どもたちは自分たちでそれらの道具や砂場をきちんと整理しなければならない。そして道具は使ったあとはきれいにして，保管小屋にきちんと整頓し，鍵をかけておかなければならない。」と，砂場での規律を述べている。
47）Marwedel, op.cit., p.278.
48）ibid., pp.300－303.
49）ibid., p.302.
50）ibid., p.115.
51）Beatty, B., *Preschool Education in America : The Culture of Young Children from the Colonial Era to the Present*, Yale University Press, 1995, pp.72－80.

Emma Marwedel's Work of the Kindergarten Movement in America

—— Froebel's Disciple Emma Marwedel and New Education Movement ——

HASHIKAWA Kimiyo

The purpose of this paper is to evaluate the work of Emma Marwedel on the kindergarten movement in America by analyzing Marwedel's book *Conscious Motherhood*, which was dedicated to Elizabeth Peabody and G. Stanley Hall.

Published in 1887, this book was the quintessential expression of maternalist ideology. Marwedel's main theme was to combine the educational influences of two authorities, each strengthening and completing the other, namely, Wilhelm Preyer and Friedrich Froebel. W. Preyer, Professor of Physiology and Psychology at the university of Jena, who was engaged in a study of the development of child's will. Preyer observed the actions of children, classifying all actions into voluntary or involuntary. In sharp contrast to Romantic nation of inborn natural capacities, he reasserted the importance of the sense in the formation of will. Marwedel argued that for children to develop to their full potential, women needed to be trained for motherhood and in scientific study of children. Marwedel suggested the following two points of view; self–control and the raising up of a moral sense, and the catching or telling of what the other people are thinking and what the object is concerning the meaning of existence. Marwedel suggested these were the essential problems for women, who deepen their understanding of children and instruct them. Marwedel's ideas stand in stark equal when compared with today's kindergarten philosophy and techniques. Her attempt, which supplement Froebel educational theory and practice with Preyer practical, psychological and pedagogical observation, was successful, because it analyzed various possibilities on the child and how this satisfied his or her intellectual and moral requirement.

In Massachusetts, where Pauline A. Shaw sponsored a network of free kindergartner, Hall promoted the study of children. Hall collected a huge amount of date in Shaw's kindergartens. We often talk about Hall's success without free kindergartner supports. Orthodox Froebelian kindergartner Susan Blow's leadership was clear at an 1895 meeting of kindergarten in Chicago. It was here that disciples of Hall and Blow met head–on for the first time. G. Stanley Hall raised specific criticism of Froebelian kindergarten theory and practice, blasting the Romantic ideology of the Froebelian kindergarten for blinding its practitioner to the real educational needs of children. Although thirty–five came to this first meeting, only two remained. The other thirty–three were so outraged at what Hall said about the psychological unsoundness of the methodology of Froebel that left in indignation.

Hall said in 1900 that Froebel was "the morning star of the child–study movement" and one of the pioneers of genetic psychology. We can be fairly certain that Marwedel's book had an influence on Hall's behavior. This book was dedicated to Hall, and it is no wonder that he knew the matter very well.

By demonstrating the practices of kindergarten Associations founded by Marwedel and Wiggin, we draw out Frobelian kindergartners unknown works and correct the problem of the kindergarten movement from Froebel to Dewey.